

## ○ワークショップ「観光経済学」

開催責任者 経営学部 赤壁弘康

南川和充

第1回 2017年1月7日

1月8日

第2回 2017年3月27日

南山大学名古屋キャンパスJ棟1階特別合同研究室



ワークショップは以下のとおり、開催された。

### ◇報告者および題目

<第1回>

1月7日（土）

1. 徐翰林（立教大学観光学部博士後期課程）  
“A Panel Quantile Regression Analysis of Tourism Effects on Poverty”
2. 麻生憲一（立教大学観光学部）  
「大学生にみるホスピタリティの特性」
3. 井出 明（追手門学院大学経営学部）  
「日本型ダークツーリズムに関する考察」

1月8日（日）

1. 江口善章（兵庫県立大学環境人間学部）  
「遺跡展示施設の共同設置する際の立地に関する定性的考察」

2. 赤壁弘康（南山大学経営学部）

「不確実な経済変動を伴う観光消費の相対的変動モデル」

<第2回>

3月27日（月）

1. 加藤好雄（福知山公立大学地域経営学部）

「地方観光地における繁忙期の交通状況の分析－宮津天橋立を対象として－」

2. 井出 明（追手門学院大学経営学部）

「ダークツーリズムとICTによる世界の把握」

3. 江口善章（兵庫県立大学環境人間学部）

「遺跡展示施設を共同設置する際の立地に関する定性的考察－単独設置について－」

#### ◇ワークショップの討論内容

研究目標に沿って得られた研究成果について、以下では3件の概要を示す。

#### 赤壁弘康「不確実な経済変動を伴う観光消費の相対的変動モデル」

本研究は消費者（需要サイド）に直接焦点を当てることによって観光消費の変動をとらえることを目的としている。観光の用役は耐久財・公共財的性質をもつため、伝統的なミクロ経済学の価格理論や効用理論にうまく調和せず理論分析が容易ではなかった。通常の財とは異なったこうした観光がもたらす用役の特性（非排除性、非排他性や非消滅性）を考慮し、これまでの経済学の分析ツールをできるかぎり踏襲しながら代表的消費者の行動をマイクロ・マクロ的（新古典派マクロ経済学の）視点から検討することによって、経済変動に伴う観光消費の相対的変動モデルを提案している。具体的には、通常の財を含む総合財の消費量で測定された観光財の存在量の変動の解過程を、確率的 Verhulst-Gompertz 方程式で定義される確率過程として明示的に表現した。

#### 井出 明「ダークツーリズムと ICT による世界の把握」

我々が歴史や社会をどのように把握しているか、世界をどのように見ているかという「地理的認識」をテーマとしている。世界に関する我々の地理的認識を考察するための観光学の方法論と ICT の活用方法を、ダークツーリズムを例にあげて提示した。旅行者のダークツーリズムの目的地の選定にあたって、地理的距離や地理的位置関係でおこなわれてきた従来の手法を再考する。地理的距離を用いるのではなく、興味関心を基準とした心理的距離に着目することによって実際に目的地として選定した（行った）場所を書き出して、ある一つの場所を起点としてそれ以外の場所を順番に「人類の悲しみの記憶」の観点から発見した共通項に基づいてつなげていきながら、相互に配置させていくという、ソフトウェアを活用したマップづくりの手法を開発した。

江口善章「遺跡展示施設を共同設置する際の立地に関する定性的考察—単独設置について—」

後背人口の多い中心地から離れた場所に 2 つの遺跡があり、これを観光資源としてプロモートすることを想定し、その一環としてこれら 2 ヶ所の遺跡の遺物を展示する施設を新たに設置する場合に、この施設をどこに立地させることがもっとも効果的かを検討する。各地点間の距離と後背人口に依存した、遺跡地点への訪問者数による観光収入および展示施設運営費用に関する仮定からモデルを定式化して、利潤を最大化するように最適な配置を決定するという分析をおこなっている。共同設置する場合を分析する目的の前段階として、本ワークショップ開催時点では、まず個々の遺跡が独立して設置するケースを準備的に考察したところ、中心地と遺跡を結ぶ直線上で中心地の内側がつねに最適設置となることが命題として導出することができた。

#### ◇研究成果発表

津田康英・麻生憲一、「地方創生拠点としての道の駅への期待」、『経営総合科学』第 106 号、愛知大学経営総合科学研究所、2017 年。

津田康英・麻生憲一、「『道の駅』設置と農業生産効果」、『奈良県立大学研究季報』第 27 巻第 4 号、2017 年。

深見聡・沈智炫、「長崎における世界遺産観光—『明治日本の産業革命遺産』と『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』のこれから—」、『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』4、pp.1-7、2017 年。

深見聡・沈智炫、「『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』にみる世界遺産観光の展望」、『日本観光研究学会全国大会学術論文集』31、pp.181-184、2016 年。

井出明・鈴木晃志郎・深見聡・須藤廣、「近代化産業遺産とダークツーリズム—産業社会の光と影を考える—」、『日本観光研究学会全国大会学術論文集』31、pp.353-356、2016 年。

深見聡、「地理教育における領土教育の重要性—大学生を対象とした領土に関する認識調査から—」、『地理教育研究』19、pp.1-10、2016 年。

深見聡、「三島村・鬼界カルデラジオパークにおけるジオツーリズムの取り組み」、『島嶼研究』17(2)、pp.1-19、2016 年。

深見聡、「長崎の観光と世界遺産—産業革命遺産と教会群のこれから—」、『地理』61(7)、pp.32-40、2016 年。

井出明、「我々は世界をいかに把握しているのか—ダークツーリズムの知識科学に対する貢献—」、『研究報告人文科学とコンピュータ (CH)』、第 2017-CH-113 巻第 9 号 pp.1-4、2017 年。

田口順等、「クルーズ客船寄港の経済波及効果」、『沖縄の観光・環境・情報産業の展開』沖縄国際大学産業総合研究所 編（泉文堂）第 2 章所収、2015 年。